

広場には人が
行き交っている。
時刻は夕暮れ。

家路を急ぐ女、
酒場へと向かう男。

噴水前には
待ち合わせの人間が
たむろしている。
かくいう俺もその一人。

相手は恋人——
——なんてそんな
気の利いた
ものじゃない。

俺が金を払って、
その女は俺に抱かれる。
それだけの関係だ。

——商売女？
いや、相手は素人。
その辺に居る
普通の娘だ。

ある歓楽街の一角に
古ぼけた掲示板がある。

指名手配だの
布告だのと
つまらない掲示物に
紛れてそれが——

彼女たちの誘いが
張り出されている。

そこから俺たちは
買う女を選ぶのだ。

商売女でもない
彼女たちが
なぜ春を売るのか。
そんなことは
俺の知った
こっちゃない。

俺は一夜限りの
ただれた関係を、
ちよつぴり
スリリングな出会いを
楽しみたいだけだ。

……だが
スリリングも
度が過ぎる
場合がある。

自称・可憐な乙女。
しかし現れたのは
トロルも裸足で
逃げ出すような
巨体……。

そういやその前の
そばかす女には
金だけ取られて
トンズラされたな……。

そんな調子で最近
ハズレばかりだ。

ああ、アタリの女を、
いい女を
抱きてえなあ……。

「あのう……」



目を上げると
フードを被った
女が立っていた。

「その……
赤い羽根のついた
お帽子……
その……
アナタが……？」

周りを気にする様子で
おずおずと
話しかけてくる。

そうか、この娘か……。

フードの影になって
ハッキリとは
わからないが
顔立ちはないかな
よさそうだ。

そして服の上からでも
わかるその
豊満な乳房……。
これは期待できる
かもしれないな。

「ああ、そうだよ。

——じゃあ早速行こうか」

娼館に並べて建てられた宿に三人して入り込んだ。彼女は椅子にちよこんと座って辺りを見回している。向かい合うようにベツドに腰掛けた俺は場の雰囲気や和らげようと話しかけた。

「こういうところは初めて?」

「あっ、はい! 人間の建物ってこんな感じなんですわねえ」

「……? 変な言い回しだな。まあいいか。」

「え、ええと、まずはキミのこと……」

「アラスウェンですわ。アライイって呼んでねっ」

「じゃあ、アライイちゃん。キミのこと詳しく聞かせてもらってもいいかな」

「はあい♡」

そう言って彼女はニッコリと微笑んだ。

「今日はどこから来たの?」

「森から来ましたあ♪」

森って……。
だが冗談言ってる
顔でもないな。
木こりの家の娘か
なんかだるうか……。

「そ、そう。
えっと、歳はいくつ?」

「ん、今年で確か
308歳になりますっ」

「あ……
さんびやく……?」

俺が言葉の意味を
理解できないでいると
彼女はおもむろに
被っていたフードを
上げていく。
その綺麗な金髪と――

人間のそれではない
耳が頭になった。

「あ、あんた――エルフ!」



「はい、エルフですう」

あ、アタリだ……。
まさかあんな
掲示板にエルフが……。

「あのお……」

エルフだと
ダメなんですかあ？」

「え？いやいやいや！
大丈夫、全然OK！」

「そうですかあ~~~~!!
よかったあ♡」

だがそう言って
ニツコリ笑う
彼女を見て途端に
不安になった。

エルフが金貰って
人間なんか
抱かれる
だろうか……。

「あの……
これから何するか
わかってる？」

「ふえ？
んーとお……
知ってますう。
エツチなことお
……ですよね？
きやつ♡」

「えっ？それって……」

「うん、処女だよ！
アナタが初めての相手♡」

マジか……。
三百年ものの処女……。

「えーっと、エッチなことは
全く経験がないの？
一人でしたりとか……」

「うん、するよお。
その、オナニー？
やだ、オナニーなんて
男の人に言ってる！」

そう口にしてまた
顔を赤らめる。

「ん……おまんこの
中を指で撫でたり
……クリトリス？を
擦ったりすると
ビクビクッ♡
ってなっちゃうの。
あと乳首も……」

「いや……そこまで
訊いてないんだけど……」

「えっやっあ……
やだ、あたしったら……♡」

「経験がないのに
どうしてこんなこと
しようと思ったの?」

「んと……
アナタも知ってる
思うけどあたし達って
長生きだよね?」

俺は頷く。
尊には聞いていたし
なによりこんな
ムチムチした308歳なんて
今まで見たことがない。

「その分その……
繁殖行為?には
感心が薄い
んだよね……」

「だけどあたしは
セックスに他のみんなより
ちよつとだけ……
ちよつとだけね!
興味があつて……
でも相手もないしい……」

それで想像しながら
オナニーしてたなら
もうセックスのことばかり
考えるように……
なつちやつてえ……」

「やだ……わたし
恥ずかしい〜!!!」

「いやいや大丈夫。
それくらい普通のことだよ。
エルフだって
生き物なんだし」

「適当に言い繕っただけだが
アリの表情は
明るくなった。」

「そうだよね!
よかった、わたしが
変なのかと思ってた!」

ア
リ

「でもホントに
エッチなこと好きなんだね。
乳首ビンビンだよ」

「えっあっホントだ!
やだあ〜♡」

「……どうなってるか
見せてもらってもいいかな」

「あ……」

「……うん、いいよ……♡
んしょ……♡」

